

2016年1月23日

第99回山口西田読書会（2016年1月23日）

第98回（同年1月16日）のprotocols

参加者：佐野、桑原、谷、千葉、南部、藤村（恭）、藤村（恵）、山田*、岡部（計9人）

順不同、敬称略、*は初参加

報告：岡部昌平

I プロトコルの確認（報告：南部）

1) 2015年12月12日の哲学的問いに関して

「宗教は究極的には利己的な営み」であり、その社会的な拡大を目指すことは争いを生むとの問いかけに対する発言が整理された。（詳細は読書会サイトのprotocolsを参照）

2) テキスト

『善の研究』第3編「善」第1章「行為上」第1-5段落途中までを確認した。実在について説明した第2編を受け、第3編は「何をなすべきか」の実践的問題が論じられており、それは第2編の冒頭「考究の出立点」の書き出し（2-1-1）に2編から4編までの関係が述べられていることに呼応していること。第1章において行為を物的運動と区別しているが、西田の意志は物体の運動をも含む概念ではなかったかなどの疑問を2-4-3の註部分より理解するなど、論理的なポイントを中心にまとめられた南部protocolsは第3編に入る上で大変役立つので是非ご利用いただきたい。

3) 哲学的問い

大きく2部に別れているので便宜的にA、Bとした。

A

- ・西田は万人がエゴ、偏見から解放されて宇宙の本体と合一するとしているのか。
- ・そのための修練が必要なのか。それぞれに「自ずから然る」（老荘思想）のか。

挫折、絶望のあげく駄目になることもある。行き着ける場合もあれば、行き着けない場合もあるだろうから、すべての人にその経験が訪れるわけではないのではないのか。

純粹経験は誰もが何らかのかたちで経験する、あるいは常にしているのではないのか。

「事実其儘に知るの意」（1-1-1）であるとの記述によれば、修練などの行為の先にあるのではなく状態として捉えるべきではないか。それがどのように意識されるのかの話として芸術などの行為が例にあがるのだと受け止めている。

B

- ・外的自然世界の運動を純粹経験に含めるとき、他人の純粹経験も自己の純粹経験の内部に包摂されるのではないのか。
- ・他人の純粹経験が自己とは独立であるとき、二つの純粹経験の一致はいかに証明するのか。
- ・以上より、西田の純粹経験は独我論的ではないのか。

独我論でないことは「序」に言及がある。また「もし意識現象をのみ実在とするならば、世界は凡て自己の観念であるという独知論に陥るではないか」（2-2-6）以降に、昨日の意識と今日の意識が独立でありながら同一の系統に属し、自他の意識にも同様の関係を見出すことができるとある。

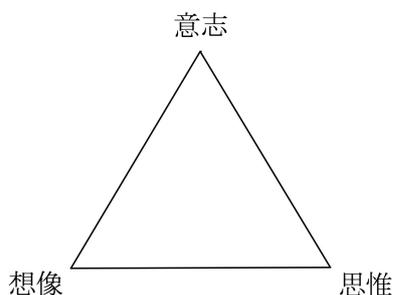
外的自然世界と純粹経験に関しては「我がこれを感じて居るとかいうような考のないのみならず、この色、この音は何であるという判断すら加わらない前をいうのである」（1-1-1）とあるのは生命科学的でもあり、色やかたちが目や耳から入った貯蔵庫が頭の中にあるのかもしれない。

色、音に関連して意識をなくした癲癇発作の子どもが、意識を取りもどすときの純粋な目にひきこまれた体験の紹介もあった。また、これとは別に癲癇発作を経て人柄が穏やかになった事例も紹介された。

II テキスト (『善の研究』3編1章5段落 [3-1-5])

第1-4段落のまとめ

- 1 段落目 第2編との関係：実在を問題にした第2編の次に、ここでは実践を問題にする。それは行為に総括される。行為とは如何なる者か。
- 2 段落目 行為とは物的運動とはことなり、意識を具えた目的ある運動である。目的が明瞭に意識されている動作を問題にする（反射、本能的動作と区別する）。
- 3 段落目 行為とは意志である。その意志の過程が述べてある。
- 4 段落目 意識の観念結合には原因が明らかでない聯想と、意識内にある統覚との2種類があり、意志は統覚である。また、意志は観念統一の作用であり、決意はその集結である。
- 5 段落目 他の統覚との関係。統覚に属するものには他に思惟、想像がある。



→意志 vs. 想像：程度の差であって質の差ではない。

→意志 vs. 思惟：意志は統一の極致である。(以下に詳述)

【第5段落後段：意志 vs. 思惟】「次に思惟と意志とを比較してみると――」

思惟の目的は真理であり、観念結合は論理の法則に支配されている。思惟は抽象概念の統一であるのに対し、意志と想像は具体的概念の統一である。思惟と意志とは区別されるが、その区別も動かしがたいものではない。

意志の背後には理由があるが、それも真理の上に働く。よって思惟により成立するといえる。(※それなら何のための区別だったのか?!)

意志、想像、思惟の3統覚は「根本においては同一の統一作用である」。

統一作用 思惟・想像：物や自己のすべて（に関する観念に対する統一作用）←理想的、可能的
意志：自己の活動のみ（に関する観念の統一作用）←現実的

※同一と言った後に区別をはじめているのか？ 上記の「←」は「これに反し」との文言に対応するが、何が何に対して反しているのか？ それとも話題の転換の意図か？

[指摘] 王陽明の知行合一のくだりで「かく思惟するが、かくは欲せぬ」とあるのが、欲しないことも行為なのか？ との指摘があった。

[佐野] 西田の立場は内面の意志を問題にしているのだから、結果としての行為は必要ない。第1章「行為上」第3段落の後半「行為の要部は実にこの内面的意識現象たる意志にあるので、外面の動作はその要部でない」の記述が該当する。

思想は行為に頭われるという考えが西田にある。ここで第1編第2章「思惟」の第6段落(1-2-6)の「例えば行為においても(中略)思想は必ず実行に現れねばならぬ」を参照。

【第6段落：意志 vs. 他の観念的結合＝聯想・融合】

意志と他の観念的結合(聯想および融合)との関係を述べている。

聯想：外界のものに観念的結合の方向が定められている。意識上に現れていない。

融合：観念的結合がさらに無意識である。(※融合はどこからきたか→ブントの心理学)

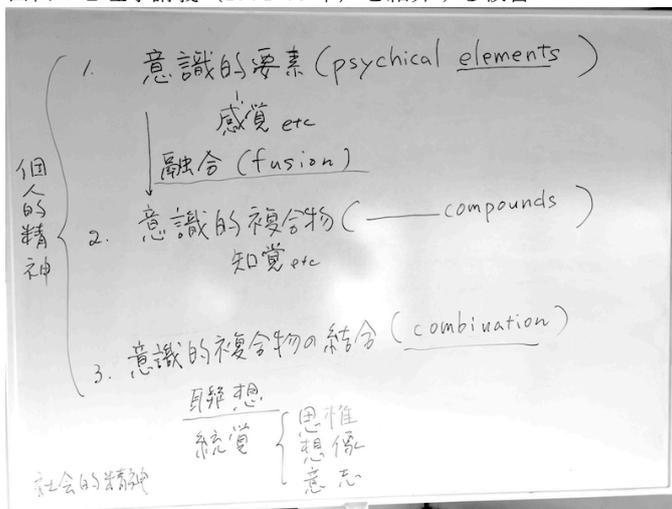
しかし、どちらも内面的統一がないわけではない。

そして、これらの統一作用の根本にある統一力を自己と名付けるなら、意志は最も明らかに自己を発表したものであり、ゆえに私たちは意識活動において最も明らかに自己を意識する。

純粹經驗の立場では、主客がなく自他の区別がない。それを統一しているのが自己であり、外に現れるのは意志である。意志は統一の極致である。では、宇宙の根本は意志であるのか——これが次章「行為下」で述べられている。

[補足] 西田は心理学を教えていた。当時、日本の大学で教えていた外国人教師にブント (Wilhelm Wundt 1832-1920) に学んだ人がおり、日本の認識論が心理学から入ることになったとの研究がある。

西田の心理学講義 (1904-05 年) を紹介する板書



板書の説明

意識の要素 (psychical elements) を問題にする (それは感覚と考えてよいが、西田は繰り返しかえし学問上の概念であり感覚が実在しているわけではないことを注意している)。これが融合 (fusion) して意識的複合物 (psychical compounds) になる。これが結合して (combination) 聯想 (受動的) や統覚 (能動的) になる。統覚には思惟、想像、意志がある。ここまでの個人的精神で、その他に社会的精神というのものもある。

融合の例として次のような整理をしている。知覚には感覚器官を経ない一般感覚と目、鼻などの感覚器官を経る特殊感覚があり、温感、触感、運動、味感、嗅感も融合して知覚になる。

[参考]

Wilhelm Wundt (1832-1920) ドイツの心理学者、哲学者。実験心理学の創始者であり、近代心理学は彼とともに始まったとされる。(中略) 彼は心理学を直接經驗の学であるとし、自己観察と実験を用いて意識を研究し、意識を究極的な心的要素としての純粹感覚と単一感情の結合によって説明しようとした。その立場は要素主義の色彩が強く、彼の心理学は構成心理学と呼ばれる。こうして彼は個人の単純な精神は生理学的心理学の研究対象としたのであるが、他方、人間の複雑高等な精神は文化や社会生活のうちに表現されるとして、それを民族心理学 Völkerpsychologie が研究するものとした。(中略) 旺盛な研究心と比類ない努力によって膨大な著述を残したが、その主なものは、《感官知覚論》(1862)、《人間と動物の精神に関する講義》(1863)、《論理学》(1880 - 83)、《倫理学》(1886)、《心理学概論》(1896)、《民族心理学》(1900 - 20)、《哲学入門》(1901)、《心理学入門》(1911) などである。児玉憲典 (平凡社「世界大百科事典」)

III 哲学的問い

純粹経験の立場からいえば、宗教を意識的に考たり、行為する（意志する）ことそのものが、宗教を否定することにならないか。宗教とは、宇宙の根本と一体になることを目指すのか、一体になれない自己を知ることか。

（報告トメ）